

付加価値のある認定プログラムの開発 第三者適合性評価制度における 高い信頼性の維持

適合性評価制度の認定機関JABが描く これからの第三者審査のあり方

1993年、「財団法人日本適合性認定協会(JAB)」は、適合性評価制度全般に関わる国内唯一の認定機関としての役割を担う純民間の非営利機関として生まれた。以来12年、その活動の歴史は日本企業におけるビジネスフィールドのグローバル化、企業市民としての社会的責任の増大といった変革の波とともにあったと言えるだろう。今後JABの果たす役割は、さらなる変革に呼応しどのように変化していくのか。また、日本における第三者審査による適合性評価制度そのものが、どのような方向に向かっていくのか。JABの井須雄一郎専務理事に話をお聞きした。



(財)日本適合性認定協会
専務理事
井須雄一郎氏

ISOマネジメント分野では 日本は世界に誇れるレベルにある

ISOマネジメントシステムに代表される第三者審査による適合性評価制度の中核としてJABが設立され、今年で12年目を迎えました。まずは、ここまでの活動成果をどのようにご覧になっているでしょうか。

井須 1992年6月、当時の通商産業大臣、運輸大臣の諮問に答える形で、日本工業標準調査会(JISC)が『我が国の品質システム審査登録制度のあり方について』という答申を行いました。これが日本における審査登録制度にとって大きな一歩とな

り、翌1993年、この答申に呼応する形で経団連の支援により、本制度の認定を担う純民間の非営利機関として財団法人日本適合性認定協会(JAB)が誕生しました。

当初は品質マネジメントシステム審査登録機関の認定からスタートしましたが、その後社会の要望に応じて順次業務を拡大し、現在ではマネジメントシステム以外にも試験所、製品認証機関、検査機関など第三者適合性評価制度全般に関わる国内唯一の総合認定機関となっています(次ページ図1)。

設立から一貫して私たちは自らの使命を『国際的に整合した適合性評価制度の実施・普及の中核としての役割を全うし、わが国産業経済の健全な発

展に寄与する』こととしており、それは12年目を迎えた現在も変わることはありません。

これまでの活動成果ですが、まずISO9001、ISO14001に代表されるマネジメントシステムに関しては、その有効性が認められ、国内企業・団体の審査登録数は年々順調に増加しています。現在、ISO9001は世界4位、ISO14001では世界トップの登録組織数を誇っており、そのボリュームだけでなく内容面から見ても日本は世界に誇れるレベルにあります。こうした事実はJABの存在意義を示す、ひとつの指標になっていると思います。

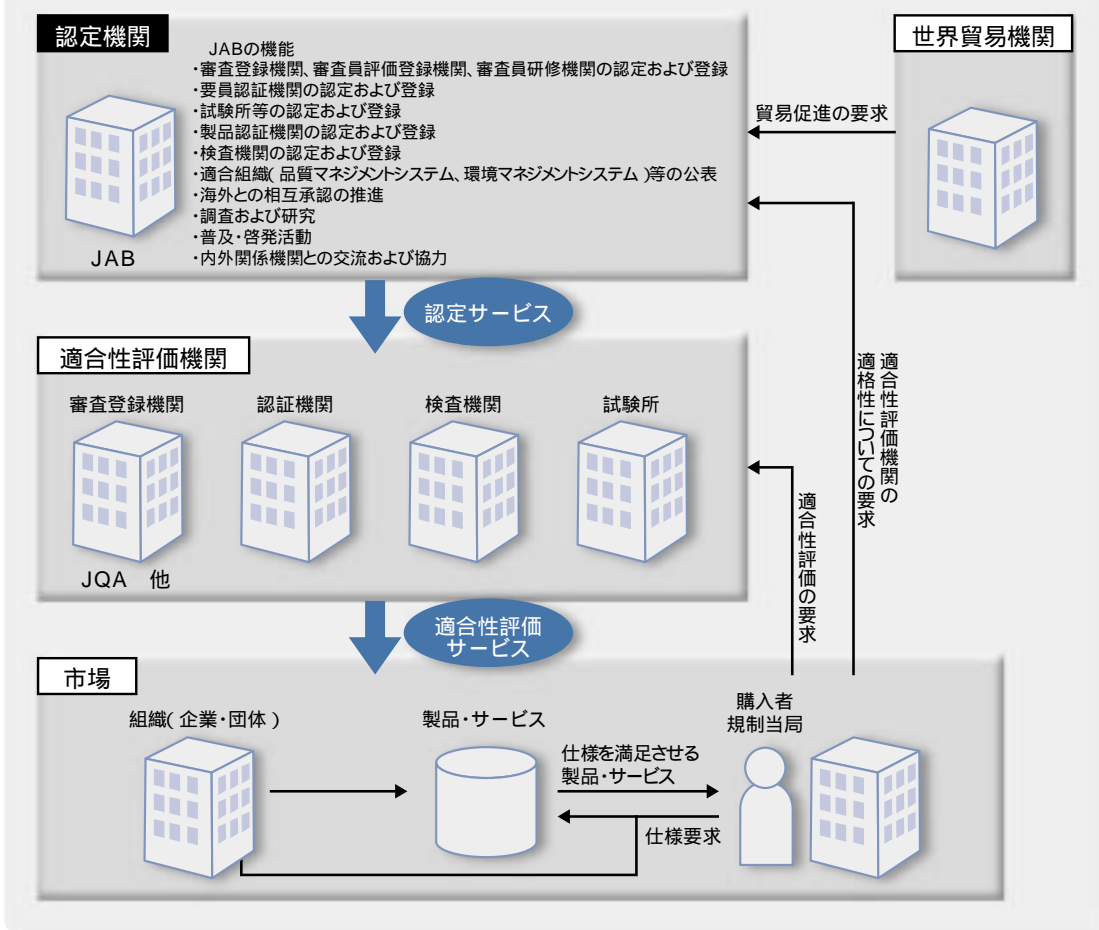
しかしながら、こうした広がりの中で、最近本制度の信頼性を損うような事例が一部に見られるようになりました。これに対しては、現在関係者により課題の整理、改善策を推進中です。

一方、試験所、製品認証、検査機関の分野につ

いては、海外諸国に比べて大きく遅れをとっているのが現状です。しかしこの分野についても徐々に認識が高まってきているのは事実で、規制分野の国際統合化や規制緩和策による民間の任意制度の活用が進むなど、環境面が整備されれば加速度的に普及が進むと見えています。

またグローバリズムの流れに対応し、国際相互承認の推進に注力することもJABの大きな活動の柱のひとつです。品質、環境マネジメントシステムではIAF(国際認定機関フォーラム)、PAC(太平洋認定機関協力機構)の相互承認協定に加盟。試験所/校正機関分野ではILAC(国際試験所認定協力機構)、APLAC(アジア太平洋試験所認定協力機構)、審査員研修機関についてはIPC(国際要員認証協会)の相互承認協定にそれぞれ加盟しています。

図1 / 第三者適合性評価制度を構成する各機関



“よそ行き”ではなく “普段着”のマネジメントを

課題として挙げられていたISO認証制度の信頼性に関してですが、日本においては『認証の取得』に注目が集まるあまり、システムの運用効果へ向けられる視線が少ないことに原因があるのではないかと声もあります。この点はどのように感じいらっしゃいますか。井須 確かに、組織の中にはISOをPRのため、あるいは取引上のパスポートといった表面的な部分で捉えているところもあります。しかしそれは仮に一時的な効果はあったとしても、ISOを本質的に活用しているとは言えません。

品質マネジメントシステムであるISO9001は製品・サービスの品質を保証しているのではなく、その組織が持っている『品質を維持向上させる仕組みがISOの規格に適合しているか』を第三者審査機関の公平・客観的な視点から審査し登録するものです。表面的に見れば、当初の目的は『規格への適合』、つまりは認証取得かもしれません。けれども組織経営という、より大きな視点から見れば、本質的な目的はその仕組みを使って常に高い品質レベルを維持、あるいは向上させることにあります。

組織の中には、長年運営してきた立派な経営システムがあるのに、『規格への適合』だけを目的として、ISO9001の要求事項に沿ったマニュアル、仕組みを別途作成している例を見かけますが、これでは認証を取得できたとしても、その後の維持管理に無理・無駄が生じます。この解決策は、自組織の経営システムをISO規格の要求事項に照らして、不足の部分を補強すれば良いのです。そうすることによって、ひとつの自組織経営システムで品質、環境、情報セキュリティ、リスク管理などの切り口に対応できる立派なシステム構築ができます。

日本では、ISOマネジメントシステムを取得した組織の提供する製品やサービスの品質や環境対応は万全であるはずと思っている一般消費者の方が多いのは事実で、組織の側も要求事項を最低限クリアしていれば良いというのではなく、それ以上を目指しているところが多いのです。これは、ISO規格を善



PROFILE

1941年生まれ。1963年北海道大学工学部機械工学科卒業。同年東京芝浦電気株式会社(現株式会社東芝)入社。一貫してエネルギー機器(重電分野)の設計、製造、品質保証、調達、工場経営に従事し、京浜事業所熱交配管部長、品質保証部長、タービンプラント設計部長、事業所長、エネルギー事業本部副本部長などを歴任。1999年(財)日本適合性認定協会に常務理事・試験所認定部長として入会。2001年より専務理事。日本機械学会、日本ガスタービン学会、火力原子力発電技術協会会員。経済産業省日本工業標準調査会適合性評価部会委員。著書に共同執筆による「適合性評価ハンドブック・ISOを正しく理解するために」(日科技連出版社)がある。

意に拡大解釈していることになりませんが、むしろ奨励されて良いのではないのでしょうか。

日本人の生真面目さと言いますか、国際規格と聞くと、それに準拠することが最優先課題になってしまうくらいがありますが、本来の目的はISOの要求事項をにらみながら、個々の経営戦略とリンクした独自の仕組み・手順を構築していくことにあるわけですね。

井須 そうです。ISOのために窮屈な“よそ行き”のシステムを作っても意味はなく、自社の経営の実態という身の丈にフィットした“普段着”のシステムであることが大切なのです。

重要なのはISOの要求事項を足がかりに、上位に位置する経営目標を実現するためにISOマネジメントシステムをいかに効果的に取り込んで行くかということ。核となる経営理念やビジョンをベースに、例えば品質部分にはISO9001、環境についてはISO14001の要求事項を経営目標とリンクする形で組み込んでいく。そうすることによって、ISOの各マネジメントシステム規格は単なる認証のためとしてで

はなく、経営そのものを支える強力なツールとして機能するはずで(次ページ図2)。

さらに言うならば、経営に直結したシステムとして一元管理することで、内部監査、マネジメントレビュー、さらには定期審査、更新審査などに伴うさまざまな手間やコストも低減できるのではないのでしょうか。

例えば審査のあり方として、今後はそうした個々の企業の経営ビジョンや独自性とのリンクを重視していくということがあるのでしょうか。

井須 審査のベースは要求事項に沿った規格適合性であり、これが大きく変わることはありません。ただ規格適合性ばかりを盾に、重箱の隅を突くような審査はあまり好ましくありません。

JABでは今後の方針として『付加価値のある審査』を掲げていますが、そのひとつの方向性としては審査登録機関に規格適合性をベースにしながらも、個々の組織の独自性、特性を充分につかんだ審査をお願いしたいと考えています。ただし、実はこれは簡単なようで難しい問題なのです。というのも審査登録機関はコンサルタントではなく、客観的かつ公正な審査が最大の使命だからです。

独自性、個別特性の勘案は、客観性、公正とある種の相反関係にあり、それを単純に規格適合性というベースにのせていくことは難しい。ひとつの方向性ではありますが、慎重な議論を要する部分だと言えるでしょうね。

そのマネジメントシステム審査登録機関の一定レベルの維持、あるいは全体レベルの向上について、認



定機関としては今後どのような点に重点を置いていきたいと考えていらっしゃいますか。

井須 やはり基本となるのは、審査登録機関の力量評価と公平性・透明性に重点を置いた審査だと考えています。そして、第三者適合性評価機関として、その審査結果が真の顧客である国民に対して信頼を付与できるよう各審査登録機関との対話を充実させて、その実現に努めていきたいと思えます。

コスト削減の視点だけから自己適合宣言を見るのは危険

ISOマネジメントシステムは産業とリンクしたものであり、まさに時代の変化とともにあるということですね。それに関連して最近ではISOマネジメントシステムをめぐる新しい動きもいくつか見られます。そのひとつが第三者審査を経ない自己適合宣言ですが、これについてはどのようにご覧になっていますか。

井須 ISO規格にのっとり内部監査などを行い、規格適合性を確認することで、個々の組織が独自に自己適合宣言をすることは可能です。

ただひとつ指摘したいのは、自己適合宣言を本来の目的と見誤ってはいけないということです。すべてとは言いませんが、自己適合宣言は審査費用の軽減という、コスト削減の部分で注目されるのは危険であると考えます。

自らが自らのマネジメントシステムを『適合』と宣言するからには相当に高い客観性が求められるのは当然です。特に市場のチェック機能が働く製品認証などと違い、マネジメントシステムは第三者審査以外の有効なチェック機能が働きにくいので、自己適合性を社会・市場に認知してもらうには、第三者審査以上の厳格さが必要なのです。

もちろん、だからといって自己適合宣言を否定するものではありません。私自身、自己適合宣言がうまく機能している組織をいくつか知っていますが、その多くはISO審査以上の厳格な仕組みを導入して努力されています。それでもなおかつ自己適合宣言を継続されるのは、それが組織価値を向上させ、市場競争力を高めることという、まさに経営判断なのでしょう。

専門機関とのアライアンスで 質の高いプログラムを提供

JABの今後の活動について、注力テーマなどを教えてください。

井須 2004年のJABの中期戦略計画に『市場に付加価値のある認定プログラムをタイムリーに提供する』とあります。この計画の具体的な活動として挙げられるのが、新しい認定プログラムの開発において、関係機関との協力関係、アライアンスを結びながら進めていくという動きです。

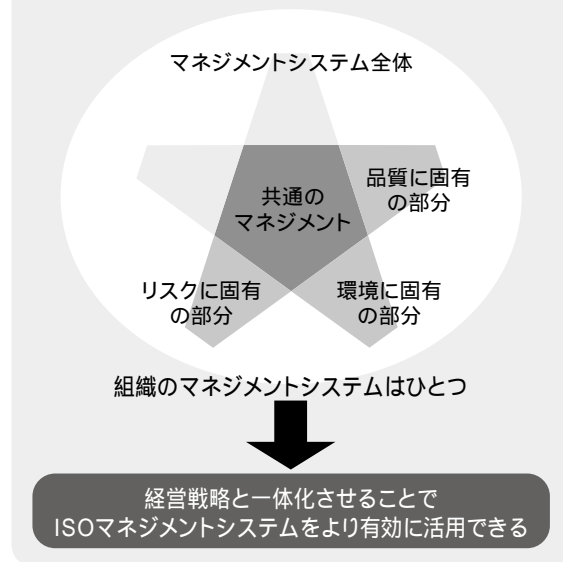
ISO15189に準拠した臨床検査室の認定プログラムの開発が進行中ですが、これなどは医療関係機関や日本臨床検査標準協議会(JCCLS)などとのアライアンスによるものですし、マネジメントシステム分野で言えば、国際規格として整備が進められている食品安全のISO22000について、食品産業界などの各団体と協力しながら開発を進めていく予定です。

自前のリソースだけでなく、適切なアライアンスを組むことによって開発のスピードアップが図れ、産業界の新しいニーズに素早く対応できること、加えてそれぞれの高度な専門知識が融合することで審査要員の質、さらに審査そのものの技術についても高いレベルを維持できると考えています。

2004年9月にISO/IEC 17011(認定機関が守るべき要求事項)が制定され、またISO/IEC 17021(マネジメントシステム審査登録機関が守るべき要求事項)が制定過程にあることを機に、JABの品質マニュアルをはじめ各種の基準および手順などの抜本的な見直しを実施しており、その中でもR300(「品質システム審査登録機関に対する認定の基準」についての指針)については、一部先取りで2004年11月から改訂版の適用を開始しました。主な改正点は、公平性、関連機関、コンサルティング規定強化、審査登録機関の力量などです。

もちろん制度の信頼性確保は、審査登録機関のみに委ねられるものではありません。冒頭で示した図(図1)にあるように、すべての関係組織がステークホルダーとして責任を持っています。第三者審査登録制度はあくまで民間による任意の制度ではありま

図2 / それぞれののマネジメントシステムの関係



すが、ここまで広まってくると、社会的責任が生じてくることも十分認識する必要があります。信頼性の確保はそこに関わるすべての者の責任であり、逆に言えば一箇所の綻びが制度全体に影響を及ぼすということを、あらためて強く申し上げたいですね。

今後は量よりも質を重視 そして地球環境保全に注力

最後に、マネジメントシステムの第三者認証制度の将来像についてお伺いいたします。

井須 JABが誕生してから現在までの12年間は、本制度の創成期および拡大期であったと認識しています。今後は量の拡大を求めるより、質の充実化を図る時期になると考えられます。具体的には、品質マネジメントシステムでは、有効性の追求と信頼性の確保および今後種々出てくると予想されるセクター規格対応がポイントとなるでしょう。環境マネジメントシステムでは、今後も量の拡大が見込まれますが、現在の最重要課題である地球環境保全、特に地球温暖化防止に活用できると考えています。JABはこれらの課題に対しても、積極的に対応していく所存です。

本日は貴重なお話をいただき、ありがとうございました。